

都道府県別賞一等

感謝

長野県 富士見町立富士見中学校 三学年

植松 美央莉

私には自慢の曾祖父がいた。二〇二〇年十月二十二日に他界した。曾祖父はパーキンソン病で、大好きだったゴルフもできなくなり寝たきりの生活を余儀なくされた。食事には細心の注意が必要だった。元々施設に入っていたが、移動による環境の変化で体調を崩し、誤えん性肺炎を患い、治療を続けたが回復せず、穏やかな光の中へ旅立った。

私が、曾祖父の訃報を知ったのは、学校帰りに父が迎えに来てくれた時だった。父から「ひいじいちゃんが亡くなった。」と告げられその意味が飲み込めず、胸が張り裂けそうだった。その時小学五年生の私は戸惑いと焦りで心が乱れ、今でもあの瞬間の記憶はとても鮮明だ。前日に私は、「明日も会いに来るから元気でね。」と伝えたが精一杯生きてくれた曾祖父には感謝で心が満たされた。寝たきりでも曾祖父は私の名前を覚え呼んでくれた。それが何よりの励みで、忘れられない最後の思い出だ。幼い頃は、優しい笑顔でたくさん面倒を見てくれ、「これにする?」と声をかけながらお菓子や洋服を買ってくれた。そんな曾祖父と突然の別れを告げる日が来て、胸が締めつけられるような痛みを覚えた。

葬儀費用やお仏壇の準備、参列者へのお礼品などはすべて死亡保険が支えてくれた。そのおかげで、急な高額の経済的負担は大きく和らぎ、私達は最後の時間を曾祖父と穏やかに過ごせた。感謝の気持ちと共に、かけがえのない曾祖父との思い出に浸った。保険は目に見えないが確かな心の支えだと感じた。この経験で私は「保険」の本当の意味を知った。保険は支えてくれるだけでなく、絶望の底から私達を救い出してくれるものだった。経済的な不安は家族の胸を焦がすが、押しつぶされる事なく済んだと実感し、家族は深く安心した。私の祖母が「保険に入っていないければこんなにあたたかくみんなを送り出す事はできなかったから保険に感謝だね。」と言っていた。本当にこの通りだと思った。保険に入っている事で救われたのは確かなものだったからだ。この事から保険に対する思いや考え方は、まるっきり変わり新たにたくさん事を学んだ。

この経験から、命は決して当たり前にあるのではなく、尊く何にも変える事ができないものだと感じた。だからこそ私は、曾祖父の分まで強く感謝して生きていく事を決めた。私の将来の夢は、プロバレーボール選手になる事。曾祖父のように最後の最後まで愛され続ける選手となるべく、絶え間なく努力をし続ける決意だ。保険は、人の「心」と「生活」と「今後」を守ってくれる

第63回中学生作文コンクール

ものだと思ってもった。明るく優しく穏やかだった曾祖父が私達家族に残した「安心」は、今も心に生きている。将来は、曾祖父を含め、支えてくれた家族に胸を張って報告できる選手になる。